

仏に代わって祈りを聞くカミガミ

——禪宗寺院における自力と他力、祈祷の構造——

大村 哲夫

キーワード 祈祷、禪、自力、他力、曹洞宗、現世利益

はじめに

禪宗は、神仏の力を頼る他力宗と異なり、自ら坐禅などの修行を通して「仏＝悟った人」に近づこうとする自力志向の宗教である。

この「自力」志向は、神仏に救済を求める「他力」志向の「祈祷」とは相容れないところがあるが、実際には多くの禪宗寺院で「祈祷」が行われている。日本三大稲荷の一つの豊川稲荷や竜神信仰で知られる善宝寺など、禪宗に属する祈祷寺院は少なくない。そこでは「交通安全」、「家内安全」、「身体健全」、「商売繁盛」、「学業成就」、「合格祈願」、「大漁祈願」、「五穀豊穡」、「病気平癒」などさまざまな民衆の願いが祈られている。

筆者は本稿で、日本最多の15,557ヶ寺〔文化庁 2005〕を有する曹洞宗を対象に、祈祷における自力修行と他力依頼の「矛盾」がどのように扱われてきたのか検討した。

その結果、

1. 仏法興隆や衆生済度といった自力と矛盾しない「公的な祈祷」は仏祖が、現世利益をもとめる他力志向の「私的な祈祷」は鎮守のカミが聞く、という役割分担がみられること、
 2. 他力志向の祈祷の構造には仏、カミ、僧、祈願者の4者の相互関係がみられること、
- などがわかった。

以下第1章では祈りと曹洞宗の祈祷について述べ、第2章では曹洞宗の「両

祖」(道元・紹瑾)の祈禱を比較して、曹洞宗の祈禱の元型と祈禱の対象になるカミガミについて検討し、第3章では祈禱の構造について述べ、終章では総括と課題を示した。

なお本稿では、曹洞宗の教義上の本尊である釈迦とその後継者を「仏」・「仏祖」、それ以外の神を「カミ」として表記した。後述するように祈禱の場では、仏・菩薩・祖師のほか本来仏教とは出自の違うさまざまな神々が祈願対象とされているからである。

第1章 祈りと曹洞宗の祈禱

第1節 「祈り」と「祈禱」

「祈り」を定義して大峯は、「人間と神との内面的交通、生ける人格的接触、対話である」[大峯 1973: 31]としている。また「祈禱」については、「神仏などの崇拝対象に祈ることで種々の願いの成就を期する行為」[長谷部八朗 1999: 471 (上)]と定義されている。

ハイラー (Heiler, F.) は、「祈り」を神秘主義的形態と預言者宗教におけるものに分けられる [大峯 1973: 31] としたが、これによると曹洞禅における祈禱は、仏やカミなどの人格神に加護・恩寵・救いをもとめるなどから概ね後者に該当するといえる。しかしここで挙げた「祈り」と「祈禱」とでは、人間と神との関係が異なっている。キリスト教などにおける「祈り」では、神と人との「交通」、「対話」が強調される。それに対して曹洞禅の「祈禱」では、神仏との交流・対話という相互通行的で継続的な行為は少なく、むしろ呪文化した経呪と定型化された祈りの文言(回向文)を、祈願者(またはその代理人の僧)がカミに対して捧げることが特徴的である。現世利益願望を期待し、呪術的な装いを持つと言う点で、「祈り」のより原初形態を示しているとも言えるが、祈願が祈禱儀礼という洗練した形を採ることから、「祈り」が発展して形式化したのだとも言えるだろう。

本稿では、曹洞禅の「祈禱」を広義の「祈り」の形態として「神仏に対する祈りの中、公私の願いの成就を期する行為で、より現世利益的傾向をも

つもの」と仮定し、論を進めていくことにしたい。

第2節 曹洞宗における祈祷

曹洞宗では宗祖道元（1200-1253）を「高祖」、その3代後で曹洞宗発展の基礎をつくった紹瑾（瑩山と号す、1268-1325）を「太祖」と呼び、本尊釈迦牟尼仏と併せて「一仏両祖」と呼び信仰の対象としている。この両祖による祈祷をそれぞれ検討することで、曹洞宗における祈祷の成立と発展、その位置づけ・意味を示すことにする。

曹洞宗の『教化研修』において、峰岸秀哉は両祖の祈祷について次のように述べている。

道元禪師（1200-1253）の仏法は、純粋な出家道であって、いささかも世俗性を含んではない。〔…〕ゆえに道元禪師には、一般民衆の求めに応じて諷経祈祷するようなことは無かった。

ところが瑩山禪師（1268-1325）になると、「瑩山清規」にみる如く、出家道を中心としながらも外護檀信に対する報恩のために福祉の祈祷が行なわれ、いわば出家道と在家を対象とする世俗性とを兼ねることになったのである。〔峰岸 1973：46〕

その結果、紹瑾門下は庶民の支持を受け、全国に展開し「宗門は興の一路をたどった」〔同：51〕。そしてその「祈祷的要素は、寺門興隆発展のための、一つの方便施設であったとみるべき」〔同：51〕としている。この峰岸の見解は、曹洞宗における両祖の祈祷についての一般的な見方を示している。しかし「祈祷」とは、単なる「寺門興隆のための、一つの方便施策」に過ぎないのだろうか？

本稿では道元の祈祷と紹瑾の祈祷について、まず両祖の寺院における修行規則である「清規」を中心に検討し、それぞれの祈祷の実態と展開をみることにする。また近現代の祈祷寺院の実態に即して、その祈祷の構造について

考察することによって、曹洞宗における自力修行と他力依頼の祈祷との整合性について明らかにしていきたい。

第2章 「両祖」の祈祷とその後

第1節 道元の祈祷

道元は、『永平寺住侶制規』（1249）で「応停止諸方護持僧參勤事」と、他へ赴いての加持祈祷を禁止している。しかし道元は祈祷を全く行わなかったわけではない。

道元撰述の修行規則を集めた『永平元禪師清規』では、その中に収録された『典座教訓』（1237撰）に「竈公諷經」、『知事清規』（1246撰）に「竈公諷經」、「三八念誦」、「龍天・土地への回向」などが見える。また道元の上堂（説法）記録である『永平広録』には、天候の回復を祈る「祈晴」を行ったことがわかる。『正法眼蔵』看經の巻には「聖節の看經」、「施主入山請大衆看經」の記載がある。この他、修行途中で死亡した修行僧や、仏忌、道元自身や会下の修行僧の師や親を追善する忌日に上堂説法も行っている。これらのうち神仏に祈願するという「祈祷」の要素が強いと思われる「竈公諷經」、「三八念誦」、「龍天・土地への回向」、「祈晴」、「聖節看經」、「施主入山請大衆看經」などについて原典より引用すると以下の通りである。

表1 道元の祈祷

祈祷	祈 祷 内 容	祈 祷 対 象	回向対象
竈公諷經	扱米扱菜時行者諷經回向竈公。所謂諷經者、安樂行品、金剛般若、普門品、楞嚴咒、大悲咒、金光明空品、永嘉証道歌、大瀉警策、三祖信心銘等也。隨宜而諷經。回向竈公也。回向云、上來諷經某經。又云上來諷經功德、回向当山竈公真宰、護法安人者、十方三世一切諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。〔『知事清規』〕	十方三世一切諸仏 (佛) 諸尊菩薩摩訶薩 (僧) 摩訶般若波羅蜜 (法) (〔略三宝〕)	竈公真宰（火防、護法安人などを期待）
三八念誦	〔『知事清規』に名称のみ記載。 (三念誦)初三・十三・二十三念。「皇風永扇帝道遐昌。仏日增輝法輪常轉。伽藍土	清淨法身毘盧舍那佛 門滿報身廬遮那佛	竜天、土地神

	地護法安人、十方施主增福增慧、為如上緣念清淨法身等。云云。】(『禪苑清規』) (八念誦) 初八・十八・二十八念、「白大衆如來大師入般涅槃、至今皇宋元符二年已得二千四十七年。已後隨年增之。是日已過、命亦隨滅、如少水魚、斯有何樂、衆等當勤精進如救頭燃、但念無常慎勿放逸。伽藍土地護法安人、十方施主增福增慧、為如上緣念清淨法身等。云云。】(『禪苑清規』)	千百億化身觀迦牟尼 當來下生彌勒尊 十方三世一切 大聖文殊師利菩薩 大乘普賢菩薩 大悲觀世音菩薩 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜 (「十仏名」)
(園頭念誦)	在菜園。朝晚燒香札拜念誦。回向龍天土地。 (『知事清規』)	竜天、 土地神
祈晴	六月初十、祈晴上堂、去年今年、春夏秋冬、天下降雨、晝夜不息、百姓憂愁、五穀不登。今永平長老、為濟拯國土之憂愁、拏先師天童住清涼時祈晴上堂、亦以祈晴。所以者何、仏法如不加入天苦若為、大衆還委悉永平意旨麼。先師未上堂時、諸仏諸祖未會上堂、先師上堂時、三世諸仏・六代祖師、一切鼻孔・萬箇眼睛、同時上堂。不得一刻先、不得半刻後也。永平今日上堂、亦復如是。良久云、一滴不息兩滴三滴、適適瀝瀝連朝至夕、變作滂沱勿奈何、山河大地滾風波。打噴嚏一下云、総不出衲僧噴嚏一激、直得雲開日出。拏仏子云、大衆向者裏看、朗朗晴空吞八極、若還依旧、水澆澆、憚家飄墮羅刹國。稽首觀迦、南無彌勒、能救世間苦、觀音妙智力。唱。(『永平広録』379)	釈迦、 彌勒、 観音
聖節看経	仏殿において聖誕の看経。 (『正法眼蔵 看経』)	
施主人山請大衆看経	仏殿において看経。施主巡堂。 施主の願いに回向。 (『正法眼蔵 看経』)	

(道元の祈禱：作表 大村哲夫)

これらの祈禱について、略説すると以下ようになる。

第1項 竈公諷経

いわゆる竈の神に対する祈禱である。禪院では食事を司ることは、重要な職とされている〔道元 1667『典座教訓』〕。その担当者は調理に際して適宜

の経呪を誦誦し、その功德を竈神にめぐらし火防と護法安人を祈願する。この祈祷は宋の僧院で行われていたものを道元が将来したものである。

第2項 三八念誦

毎月3のつく日である3、13、23日、および8のつく日8、18、28日に僧堂で十の仏名を唱えて祈る。龍衆・天衆や土地神といわれる護法のカミガミに称名の功德を回向して、国家、仏法の興隆と、辨道修行の成就、仏法を外護する人たちへの増福増慧を願うものである。宋からの将来である。

第3項 園頭念誦

僧侶の食事の材料を作る菜園において、重要な仕事とされた担当者(園頭)が行う祈祷である。圃場で朝晩念誦を行いその功德を龍天・土地神にめぐらす。

第4項 祈晴

道元の時代は坐禅と共に住職による「上堂」が修行の中心であった。上堂とは禅院の講堂である法堂において、当代の仏である住職が須弥壇に登壇して修行僧に行う説法である。この道元の上堂記録が『永平広録』であり、その中に唯一祈晴が見られる。多雨によって作物が稔らず百姓が困っているため、道元の師である如浄(宋僧 1163-1228)の前例に倣って祈晴を行ったというのである。特別の祭壇を設け儀礼を行うのではなく、祈晴に因んだ説法を行いその最後に釈迦、弥勒、観音に晴天を祈っている。

第5項 聖節看経

皇帝の誕生日に聖寿無疆を祈る看経である。

第6項 施主入山請大衆看経

修行道場に寄附を行った俗人のために看経して、その施主の願い(多くは先亡)に功德を回らすもの。いわゆる「祈祷」に一番近い。

これらの道元の行った祈祷の例から言えることは、道元の祈祷は「私的な祈祷」は少なく、国家、仏法、施主一般、衆生の安穏、修行僧の仏道精進・辨(弁)道無難を祈るという自力修行を支えるための「公的な祈祷」が中心

であった、ということである。

そして祈りを捧げる対象は、仏(「十仏名」)や、仏法僧の三宝(「略三宝」)など仏祖などであり、その功德力を祈願成就の対象や、護法の龍天・土地神などに回らす、という構造をとっている。

第2節 紹瑾の祈祷

さて道元と比較して変化が生じたとされる紹瑾の「祈祷」はどうであったろうか。

紹瑾の定めた禅院の規則である『瑩山清規』には「祝聖諷經」をはじめ多くの祈祷とその回向が記載されている。主だったものだけでも附録に示したように道元に数倍し、日常の行事として祈祷が行われていたことがわかる。藤井正雄は、「道元の没後、徹通義介を経て瑩山紹瑾に至ると法要儀式が整備されて、諷經祈祷が増大して甚だしく密教化して」[藤井 1993: 273]きたと指摘している。

筆者は、紹瑾の祈祷がどのような神仏を対象に祈られたのか、に注目した。すなわち禅では釈迦またはその後継者である達磨などの祖師の言動に学び、敬意を表してこれに礼拝を行っている。道元の場合前節で見たように仏祖に祈祷を行い、その功德を祈願成就の対象や竈公・土地神・龍天という護法のカミに回らしていた。紹瑾でも同様の構造が見られるのであろうか？

結論からいうとそのような例は「仏忌」などのケースに限定され、多くの祈祷では仏祖以外のさまざまなカミガミを対象に祈りが行われていた。

一例を挙げると紹瑾は、「大般若經結願疏」において大般若經の功德を、以下のように回らしている。

般若十六会の一切三宝・極安楽世界等の十方三宝・本尊界会観自在尊・二十八部衆、并に信心の施主某甲及び子息某甲等の本命元辰・一切の星宿・十六善神等、護法の竜天・三界の萬靈・天神地祇・六十余州三千余座の神祇・当道前後の鎮守・仏法大統領白山妙理大権現・当国の応現某明

神・当莊の総社別社部類眷属ないし守宮守道神等に回向す。おのおの威光を増加し、衆生を利済して、入道せしむる者なり。

[[瑩山禪師清規] 原漢文附録参照]

すなわち「釈迦が般若経を説いた法会に集まった仏法僧の三宝、極楽の三宝、観音などの仏菩薩に加え、二十八部の天部衆、外護者である施主およびその子息の運命を司る干支の星、全ての星々、般若経を受持し読誦する人を守護する十六の護法の夜叉、護法の龍衆・天衆、欲界・色界・無色界の三界全ての精霊、日本の天つ神、国つ神、日本六十余州三千余座に鎮座する神々、当道周辺の鎮守の神、仏法大統領である白山妙理大権現、当国に出現した明神、当地域の総社や別社・あらゆる神々・産土神や護法の神々に、大般若経典読誦の功德を廻らし、その功德によって神仏の威光が増加され、その神仏が衆生を救う」という構造が見られる。

紹瑾の祈祷で祈られる神仏は、宋の禪林で行われていた中国やインド由来のカミガミに加えて、日本在来の多くのカミガミが対象とされていることが分かる。このように祈祷の対象に日本在来の神祇を取込むことは、曹洞宗に限らず鎌倉期の臨済宗においても見ることができる [原田正俊 1999]。

道元は、宋朝の禪院で行われていた祈祷の中から、自身の修行観に合う祈祷を精選して将来したと推測されるが、紹瑾は師である義价（道元・懐奘の弟子1219-1309）が入宋将来した各種祈祷に、日本のカミガミを積極的に採入れている。そして祈祷の内容も、道元が出家者の辨道増進が主であったのに対して、外護者（檀越）へ功德を廻らすものが増えている。このことは紹瑾が俗人教化に熱心であったと伝えられていることにも符合する。

さらに元から『禪苑清規』に代わって『勅修百丈清規』（1338）が導入されると、禪宗寺院において祈祷への傾斜がますます強まり、その結果「禪僧を権力者の幫間化するとともに、他面禪寺を祈祷道場化」[圭室諦成 1964：51] したといわれる。確かにこの時代、元の入寇（1274、1281）を機に幕府

より各寺院に怨敵降伏の祈祷が命ぜられている。そして祈祷が禅院の日常行事化していくと共に、入宋入元の経験があるなどの知識層である禅僧が権力者によって請を受けている。道元や紹瑾も北條氏や天皇から召されているが、「幫間化」と言うよりむしろ禅僧が臨済の鎌倉五山、京都五山の例に見られるように、権力者の「政治顧問」化していったと見る方がより適切であると思われる。

第3節 「神人教化」と「国譲り」

紹瑾の祈祷に現れる日本のカミガミは、どのようにして曹洞禅の祈祷に摂取されていったのだろうか？

中世の神仏のコスモロジーについては、十界論と須弥山説を中核とする仏教的世界観に基づいており、その中に日本の神が位置づけられていた〔佐藤弘夫 1995〕。日本の神は仏教の仏たちとの間に本地垂迹の関係を結び、「救う神」としての仏と「怒る神」としての神祇という役割分担をとおして、安定した地位を占めることが可能となった〔佐藤 1995〕と論ぜられている。このように神仏が曼荼羅のように布置された日本の中世世界に、新たに將來された禅宗が参入し、徐々に堅固な顕密体制を蚕食していったのである。曹洞禅の教線拡大に伴って、禅宗の信仰体系の中に在来のカミガミが取込まれた構造が、いわゆる「神人教化」である。このことについて松井昭典は、次のように述べている。

禅僧の偉大さを知らしめる為にその地方固有の土俗信仰に附会して、土俗神が参禅帰依、或は悪龍鬼神・怨霊が禅僧の定力によって鎮められるなど、所謂神人教化〔…〕
〔松井昭典 1969：792〕

現在「祈祷寺院」として知られる寺院の神々は、このような神人教化の縁起をもつものが多い。例えば山形県鶴岡の善宝寺の縁起等では、概ね次のように伝えられている〔阿部友紀 2005〕。

1. 平安時代：竜華寺の開山妙達上人が法華経を誦読していると龍が出現して聴聞していた。
2. 鎌倉時代：紹瑾の弟子で総持寺二世の峨山紹碩が竜華寺で龍に出会い仏戒を受けた。
3. 室町時代：峨山紹碩の法孫、太年浄椿が竜華寺を復興。龍澤山善宝寺と称す。出現した龍王と龍女に戒脈伝授。龍王龍女は護法と祈願者の諸願成就を誓う。

竜華寺開山の妙達上人は、説話集などにも登場する高僧であり、峨山紹碩は紹瑾の高足で多くの弟子を育てた人物である。この門下が多く東北地方の教化を図っている。太年浄椿は実質的な善宝寺の開山であるといえる。

このように縁起は、「歴史的に高名な僧に土地のカミが帰依し仏教の教えを受けられ、その見返りに寺院の守護と信者の諸願成就を誓う」という構造を採っている。つまり「神人教化」は古代の「国譲り」などと同じ構造を持つ。曹洞宗の拡大によって生じたであろう地元のカミ（そしてそれを護持する人々）との確執を「神人教化」という伝説で解消したのである。換言すれば地方の信仰世界において、禅宗の仏祖が在来のカミを取込むという形で、権力の移譲とその包括化が行われたといえる。

また「神人教化」による土俗のカミの取込みは、同時にそれまでのカミと民衆との間の祈祷を通じた関係をも取込むことになった。このことは曹洞宗寺院において従来出家修行者による「自力救済」中心から、在俗庶民の現世利益願望に対する「他力救済」へ開かれる、という教化方針の拡大をもたらした。すなわち道元の「公的な祈祷」主体から、紹瑾の現世利益を願う「私的な祈祷」主体へと、祈祷の質が変化したのである。そしてこの他力救済への道が開かれ、「祈祷」が儀礼として体系化されたことが、「曹洞土民」と言われるほどの庶民教化を達成することを可能にしたと考えられる。このことは紹瑾の弟子峨山紹碩の門下が全国展開をして曹洞の法門を拡げ、紹瑾が開山、峨山紹碩が二世をつとめた総持寺の末流が現在の曹洞宗寺院の98%にも

及んでいることからわかる。

第4節 祈祷寺院で祈られるカミガミ

寺院をその護持形態によって分類すると「祈祷寺院」、「回向寺」、「供養寺」がある。ここでいう「祈祷寺院」とは、檀家によって護持される「回向寺」や「供養寺」と異なり、主に信徒によって護持されている寺〔長谷部 1999〕である。

「祈祷寺院」では、実際にどのようなカミに祈りを捧げているのだろうか？
以下に祈祷で知られる主な曹洞宗寺院と祈祷の対象になっているカミを挙げる。

表2 祈祷寺院と祈られるカミガミ

寺院名	所在地	祈祷対象のカミ	祈祷内容	その他
菩提寺(恐山)	青森県下北	「延命地藏菩薩」	諸願成就	死者供養の霊場、湯治
善宝寺	山形県鶴岡	「竜神・竜女」	大漁祈願、海上安全等	東の金比羅さん 民間祈祷師の守り神
迦葉山竜華院 弥勒寺	群馬県沼田	「中峰大薩(中峰尊)」開山の弟子。迦葉尊者の化身。天狗	諸願成就	
高岩寺 (とげ抜き地藏)	東京都巣鴨	1. 「延命地藏尊」 2. 「洗い観音」	1. とげ抜き 抜苦 2. 病氣平癒	
最乗寺	神奈川県足柄	「道了大薩埵(道了大権現)」開山の弟子。十一面観音の化身。烏天狗。	諸願成就	
総持寺	神奈川県鶴見	「三宝大荒神」	諸願成就 火防	
可睡斎	静岡県袋井	「秋葉三尺坊大権現」観音大士の化身。迦楼羅身(烏天狗)。	火伏 諸願成就	
妙厳寺 (豊川稲荷)	愛知県豊川	豊川ダキニ貞天	商売繁盛 開運招福	日本三大稲荷

(禅学大辞典、各寺HPなどより大村哲夫 作表)

この内、善宝寺、最乗寺、妙巖寺は「洞上三大祈祷道場」と呼ばれている。祈祷寺院でも本尊として祀られているのは多く釈迦や祖師であるが、参拝者はそのことに関心を持たない。しかしその本尊や祖師に帰依して護法・鎮守・衆生済度を誓ったカミガミは多くの信者を集めている。

1980年代に曹洞宗で実施された面接法による実態調査では、曹洞宗の檀家のうち10.1%しか本尊を知らないという結果が報告されている。曹洞宗の二大本山である永平寺、総持寺の開山についても知っているとは答えたのは7.3%である〔曹洞宗宗務庁 1984〕。曹洞宗の信仰の対象は、釈迦と道元・紹瑾の二開山の「一仏両祖」であるが、檀信徒にはほとんど知られていないといっている。この事実から敷衍して考えれば、祈祷に訪れる信者たちが、祈祷寺院の本尊や宗旨を知らないことはむしろ当然かも知れない。信者にとって本尊が誰かということより、願い事を叶えてくれるカミガミが重要だと言えよう。

第3章 祈祷の構造—二者関係から四者関係へ

一般に祈願というと「祈願者がカミに願いごとをする」、という「二者関係」が考えられるが、禅院での祈祷ではそれだけではない。すなわち仏法興隆などの「公的な祈祷」では、本尊釈迦牟尼仏に直接祈願する「二者関係」であるが、自力の枠から逸脱する「私的な祈祷」は、仏祖ではない他のカミガミに祈る「四者関係」となっている。

後者の他のカミガミを対象にした祈祷過程を簡条書きにして例を挙げると、以下のとおりである。(具体例は総持寺祖院における荒神祈祷の場合を示したが、他の場合もほぼ同様である)

0. 禪の高僧に神通力を持ったカミが弟子入りし、仏の教えを授けられ、その代わりに仏法擁護と信者の諸願成就を誓う。

〔僧 → カミ〕、〔カミ → 僧・信者〕、

例：総持寺では紹瑾から三代目の太源宗真の時、池（地）中から三宝大荒

神が出現して護法を誓った。三宝荒神は日本独自のカミで、三面八臂、憤怒相であるなどその姿は修験系の蔵王権現などに似る。

1. 願いのある人（祈願者）が、修行を積んで「験力」をもつとされる僧侶に祈禱を依頼する。

[祈願者 → 僧]

また祈願者は、供物を整え依頼するカミに捧げる。

[祈願者 → カミ]

例：祈願者は受付で祈禱を申込む。祈願者の氏名、年齢、住所、祈願の内容等を書く。また特に三宝荒神に酒（一升瓶）を供える人もいる。

2. 願いを受けた僧侶が経呪を読誦する。

[僧 → 仏]

例：色衣を着用し金襴衣を搭けるなど普段より派手に装った導師と黒衣の修行僧が、三寶荒神殿で祈禱を行う。祈禱の場合は般若心経を祈禱太鼓（通常木魚）で読み、数回繰り返すなど、通常の読経より迫力のある読経をする。導師は理趣分といわれる大般若経の第578巻などを真読する。

3. 仏の言葉である経呪は霊力があると信じられるので、これを読誦した僧侶は功德を受ける。

[仏 → 僧]

4. 僧はこの功德を、護法を誓約したカミガミに向け（回向）、供養し、祈願者の願いを伝える。

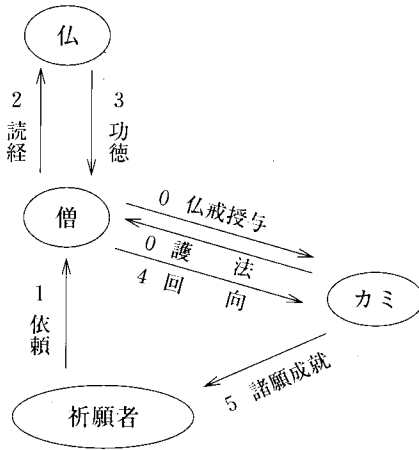
[僧 → カミ]

例：「神功皓々として、聖徳昭昭たり、およそ禱祈あればかならず感應をこうむる。〔…〕集むる所の功德は、三宝大荒神に祝献し奉り〔…〕、冀う所は〔祈願内容〕」（回向文）

5. 回向によって功德を得たカミガミが、祈願者の願いを聞く。

[カミ → 祈願者]

仏と僧、カミ、祈願者の四者関係となっており、これを図示すると以下
のようになる。



図の四者を表す円の上下の位置関係は、
上に行くほど高いレベルの力を有してい
る。

- 宇宙の真理を悟った「仏」は、計り
知れない力をもっている。
- 釈迦と同様の修行をして悟りを得た
「僧」は仏に準ずる験力を持ち、土
地の「カミ」を凌ぐ力をもつ。
- 「僧」は「仏」と修行に由来する力
を行使し、「カミ」にその功德を振
り向けることができる。
- 「カミ」はその功德を受け、「僧」
の依頼を聞き、「祈願者」の願いを
聞く。

図1 祈祷の四者関係 (作図 大村哲夫)

おわりに

道元は、入宋偏参の経験から坐禅を中心とした自力の修行法を日本にもたらした。道元の修行の中で行われる祈祷は、修行僧の辨道増進や、仏法興隆、国家の安寧など自力修行を助ける「公的な祈祷」が中心であり、釈迦へ祈願をし、仏法を助けるカミガミもこの公的な祈祷を援助するという構造をとった。

その後道元の後継者達は、出家修行者だけでなく在俗の外護者との関係を深めた結果、彼等の願いに応じて他方志向の「私的な祈祷」を増やし、密教系の祈祷作法を取込んでいった。祈祷の対象は仏や祖師へ直接ではなく、仏法に帰依したカミガミに祈願する構造がとられた。祈られるカミはインド由来の古くから仏教に採入れられたカミガミだけではなく、中国や日本土着のカミガミも対象となった。本地垂迹や神人教化の過程を経て、稲荷や天狗などの土着のカミは、中世仏教コスモロジーに位置づけられていった。

この仏とカミの役割分担については、「仏は救い、神は罰する」という見方が中世人の通念になっていたと佐藤弘夫 [1995] は述べている。佐藤は、「他

界にあって来世、次世の救済を事とする仏を〈救う神〉、此土にあって賞罰を司る神仏を〈怒る神〉」[佐藤 1995：9]として両者の役割分担について指摘している。筆者はこの〈怒る神〉の機能に、「祈りを聞く」という機能を追加し〈怒り、そして祈りを聞くカミ〉としたい。そして近世以降になると、仏の機能である「救い」のうち「私的な」救済は、むしろ佐藤の言う〈怒る神〉の主たる機能となって、〈祈りを聞くカミ〉と変質し、より救済に専門化されたようにみえる。しかしこのことについてはさらに検討を加える必要がある。

そして祈祷の積極的な導入と軌を一にして、曹洞宗の教線は飛躍的に日本全国に拡大し、日本最大級の教団となって現在に至っているのである。

「祈祷」に対する評価は、道元のいわゆる只管打坐の変質として、従来消極的な評価がされていた[圭室 1969ほか]。しかし筆者は自力志向の仏祖の他に、その弟子として衆生救済を誓ったカミガミへの「祈祷」という構造を採用することによって、「自力」と「他力」の矛盾を解消し、自力他力それぞれの在り方を併存させた発想にむしろ注目している。筆者はそこに「仏」と「カミ」が、仏教的コスモロジーの中で相互に深い関わりを持ちながら一定の独立性を保つ、中世の宗教世界と共通するものを見る。

またこのような祈祷の構造は、布教と寺院経営の基盤確立を図る宗教者側が一方的に仕掛けたというより、現実的な救いを求める民衆の信仰のエネルギーとが相俟って作り出されたものであろうと筆者は考えている。

南北朝から室町、戦国、織豊、徳川、明治維新、そして第二次大戦とその敗戦へと続く長い歴史の中で、度重なる社会制度の変革があった。これらの激動の世を経て、現代なお多くの祈祷寺院が民衆の信仰を集めていることは、民衆の禅宗寺院に寄せる強い現世利益願望の証左であるといえる。換言すれば自力救済の象徴である仏と、民衆の願いを聞く他力の救済者としてのカミガミの共存に、中世以来今日に至る禅宗寺院の「自利・利他」という宗教的社会的役割が象徴されているのではないだろうか。

あたかも父権的権威的な「神」に代わって、キリストであるイエスや聖母マリア、多くの聖人が民衆の祈りを聞き届けるカトリック信仰にみられるように、

禪宗寺院では「仏祖」に代わって、護法安人の「カミガミ」が民衆の願いを聞いているのである。

【文献】

- 阿部友紀 2005「善宝寺信仰論 序説」『東北民俗』第39輯
文化庁 2005『宗教年鑑 平成16年版』
道元『永平元禪師清規』（曹洞宗宗務庁 1956）
藤井正雄 1993『祖先祭祀の儀礼構造と民俗』弘文堂
長谷部八朗 1992『祈祷儀礼の世界—カミとホトケの民俗誌』名著出版
————— 1999「祈祷」「祈祷寺」『日本民俗大辞典』弘文堂
原田正俊 1999「五山禪林の仏事法会と中世社会—鎮魂・施餓鬼・祈祷を中心
に—」『禪学研究』第77号、禪学研究会。花園大学
『瑩山禪師清規』（鏡島元隆監修 大法界閣 1974）
鏡島元隆他 1972『訳注 禪苑清規』曹洞宗宗務庁
松井昭典 1969「曹洞禪の伝播過程における祈祷観の変遷について—初期教団
と神祇との交渉を中心として—」『印度学仏教学研究』17(2)
峰岸秀哉 1972「日本曹洞宗の中世期に於ける宗風の民衆化について」『教化
研修』15
————— 1973「道元禪師・瑩山禪師の祈願祈祷について—曹洞宗伝道史研究
序説 その(3)』『教化研修』16
大久保道舟『道元禪師全集』筑摩書房
大峯顕 1973「祈り」『宗教学辞典』東京大学出版会
佐藤弘夫 1995「怒る神と救う神」『日本の仏教』3号 法蔵館
曹洞宗宗勢調査委員会 1984『宗教集団の明日への課題—曹洞宗宗勢実態調査
報告書—』曹洞宗宗務庁
圭室諦成 1964「禪宗と祈祷」『大法輪』10月号
渡部正英 1985「禪宗祈祷寺院と庶民の接触について」『宗教研究』68-4
禪学大辞典編纂所 1978『禪学大辞典』大修館

【附録：『瑩山清規』にみられる祈祷】

祈祷名称	祈祷内容	祈祷対象	祈願内容
祝聖 諷經	毎月1、15日 僧堂：粥時に歎偈念誦。 仏殿：大円満咒一遍、 消災咒三遍 回向	「十仏名」 無量寿仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜	奉為 今上皇帝聖寿無疆 祝延 今上皇帝聖寿無疆
応供 諷經	毎月1、15日 大佛頂萬行首楞嚴秘密神 咒	十六羅漢 一切応供部類 ・眷屬 十方三世一切諸仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜	本寺檀那諸檀施主現当悉 地 皆得解脫 山門栄昌 諸縁吉慶
土地 堂諷 經	毎月2、16日 僧堂：粥時に歎偈念誦。 土地堂：大悲圓滿無礙神 咒 消災妙吉祥神咒 を諷經。	「十仏名」 回向 当山土地 護法竜 天 合堂真宰 三界萬靈 今年歳分主執陰陽 護伽 藍神 招寶七郎大権修理 菩薩 十方三世一切諸仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜	奉為 当山土地当山竜王 增加威光 護法安人 神光遠照 福德無辺 護 法安人 諸縁吉慶
檀那 諷經	毎月3、17日 僧堂：粥時歎偈念誦。 仏殿：大悲圓滿無礙神咒 消災妙吉祥神咒諷 經（拝無し）	「十仏名」 十方三世一切諸仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜	奉為 本寺檀那 十方施 主 福寿莊嚴 回向 本寺檀那 諸檀施 主 本命元辰 当年属星 增加威光 所冀 福寿無量 諸縁吉 利者
韋駄 天諷 經 (庫下 諷經)	毎月3、17日 庫下：大悲圓滿無礙神咒 消災妙吉祥神咒を 諷經。	韋駄尊天 厨司監齊使者 主湯火神明 十方三世一切諸仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜	冀 山門鎮靜 中外咸安 火盜及除 檀信婦崇 諸 縁吉利
三八 念誦	毎月3、13、23、8、18、 28日 僧堂：念誦	「十仏名」	報竜天 (三念誦) 皇風永扇帝道 遐昌。仏日増輝法輪常転。 伽藍土地護法安人、十方 施主増幅増慧、為如上縁 (八念誦) 白大衆 如来 大師入般涅槃、今至日本 元亨四年甲子已得二千二 百七十一載。是日已過、

			命亦隨滅、如少水魚、斯有何樂、衆等當勤精進如救頭燃、但念無常慎勿放逸。伽藍土地護法安人、十方施主增福增慧、為如上緣
居常念誦	祝聖、土地、檀那の歎偈のない粥時。 僧堂：念誦	「十仏名」	
祖師堂諷經	毎月5日 祖師堂：大悲圓滿無礙神咒	祖師 十方三世一切諸仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜	奉為 達磨大師 百丈禪師 歷代祖師 增崇品位者
火徳諷經	毎月8、18日 土地堂あるいは仏殿において火難消除を願う 大悲圓滿無礙神咒、消災妙吉祥神咒を諷經。	南方火徳星君 火部星衆 十方三世一切諸仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜	回向 南方火徳星君 火部星衆增加威光 無量徳海 所冀 三門鎮静 中外咸安者
布薩	毎月15日、30日 戒律に叶った修行をしているか点検反省する。		
圓通諷經	毎月18日、觀音經一卷	王法明王千光王城圓通教主施無畏者（觀世音菩薩） 十方三世一切諸仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜	回向 王法明王千光王城圓通教主施無畏者 普門示現利益一切諸奉仕者、 所願成就 修行無為諸縁吉利
普庵諷經	毎月9日 大佛頂萬行首楞嚴神咒	回向 普庵寂感、妙濟真覺、昭靈呪大徳・慧慶禪師會下百万火首金剛・無数天竜八部聖衆・修造方隅・禁忌神將。 十方三世一切諸仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜	所祈 山門鎮静 中外咸安 此大道場永無魔事 火燭無虞 檀信婦崇 諸縁吉利
居常粥了諷經	通常の粥罷諷經	回向 眞如實際無上佛果菩提 祝獻 護法竜天・護法聖者・三界萬靈・十方至聖・日本国内大小神祇・当山土地・当山龍王・護伽藍神・十八善神・招寶七郎大権修理菩薩・白山・八幡・監齋使者・多	所集殊勲祝獻 本寺檀那・十方施主・合山清衆・本命元辰・当年属星・守道守宮・一切聖造。 所冀 山門鎮静 修造無難 十方施主 福寿莊嚴 法界衆生 同圓種智

		聞・迦羅・稻荷神等・合堂真宰・今年歳分・主執陰陽・權衡造化・南方火德星君・火部聖衆。十方三世一切諸仏諸尊菩薩摩訶薩摩訶般若波羅蜜	
日午 (日中 諷誦)	毎日 仏殿：佛頂尊勝陀羅尼 七遍	回向 真如實際・十方三寶・三界萬靈・一切護法日域神祇・合山龍天・十方檀那・合堂清衆・元辰年星・守宮守道。十方三世一切諸仏諸尊菩薩摩訶薩摩訶般若波羅蜜	所冀 山門鎮靜 辨道安穩 超証佛果 利益衆生 諸縁吉利
參後	大佛頂萬行首楞嚴神咒	回向 真如實際無上佛果菩提。祝獻 護法龍天・護法聖者・三界萬靈・十方至聖・日本国内大小神祇・当山土地・龍天善神・合堂真宰・主執陰陽・權衡造化・善惡聰明・南方火德星君・火部聖衆・修造方隅・禁忌神將・厨司監齋使者・稻荷・迦羅・多聞陀天。十方三世一切諸仏諸尊菩薩摩訶薩摩訶般若波羅蜜	普資聖德 佛日增輝 法輪常転 僧寶繁昌 皇風永扇 帝道遐昌 山門鎮靜 内外咸安 檀信婦崇 諸縁吉利
設齋	追善供養などで、施主によって昼食が供養された場合。	十方雲納 聖凡之衆 (山内の僧)	回向 先考覺靈 莊嚴報地 圓滿種智
亡者 回向	追善供養 大佛頂萬行首楞嚴神咒	十方三世一切諸仏諸尊菩薩摩訶薩摩訶般若波羅蜜	奉為 某名 資助覺靈 莊嚴報地 伏願 処生死流 驪珠独輝於滄海 踰涅槃岸 柱輪孤朗碧天 普導世間 同登覺路
夏中 祈禱 回向	般若心經、觀音經、消災 妙吉祥神咒	回向 真如實際 無上佛果菩提 祝獻 護法諸天・大權真宰・三界萬靈・十方至聖・今年歳分・主執陰陽・權衡造化・善惡聰明・南方火德星君・火部	專祈 堂頭和尚道体安穩 福寿増長 災障不侵 吉祥如意 次冀 山門鎮靜 内外咸安 火盜公私 諸縁吉利者

		<p>聖衆・堂頭和尚本命元辰・建生星斗・日本国内大小神祇・当山土地護伽藍神・合堂真宰・尽祈祷会上無辺靈呪・憑茲妙善・普用回嚴。 十方三世一切諸仏諸尊菩薩摩訶薩摩訶般若波羅蜜</p>	
<p>祈祷 千卷 誦經</p>	<p>当塗王經一千卷</p>	<p>回向 施無畏者觀自在尊王法明王千光王城三十三現・十方利益三界萬靈・一切神祇。 十方三世一切諸仏諸尊菩薩摩訶薩摩訶般若波羅蜜</p>	<p>祝獻 大日本国天照太神・六十余州三千余座神祇・天龍鬼神等大小福德・今日願主本命元辰・当年屬星・生土氏神・居処鎮守・祈祷会上無辺靈呪。 伏願 除病延命（所願成就依時用之）諸縁吉慶者。</p>
<p>看經 通回 向</p>		<p>回向 三寶累祖・一切護法・守道善神・日本諸神・三界萬靈・伽藍鎮守・合堂真宰增加威光。 十方三世一切諸仏諸尊菩薩摩訶薩摩訶般若波羅蜜</p>	<p>所冀 仏祖久住 利濟人天 加被護念 助發道心 消除罪障 道業純熟 广度衆生 四恩三有 報謝者。</p>
<p>大般若經 結願疏</p>	<p>大般若經</p>	<p>回向 般若十六會之一切三寶・極安樂世界等之十方三寶・本尊界會觀自在尊・二十八部衆・并信心施主某甲・及子息某甲等本命元辰・一切星宿・十六善神等・護法龍天・三界萬靈・天神地祇・六十余州三千余座神祇・当道前後鎮守・仏法大統領白山妙理權現・当国応現某明神・当莊總社別社・部類眷属乃至守宮守道神等。</p>	<p>各增加威光 利濟衆生 令人道者。 久持金剛不壞之寿命 增長福慧遠離八万四千之塵勞 消滅業苦身心快樂 諸縁吉慶</p>
<p>因病 祈祷</p>	<p>病氣平癒の祈祷 適宜の經呪誦誦</p>	<p>回向 真如實際 無上佛果菩提 祝獻 護法大權修理、合堂真宰、大日本国天照太神、当処鎮守大明神、別社總社、六十余州三千余座神祇、天龍鬼等、大小福德。</p>	<p>所祈 本命元辰 某甲安穩 無病自在 心中所願成就 祈祷会上無辺靈呪 伏願 諸縁吉慶者</p>

		十方三世一切諸仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜	
尊宿遷化	高僧の葬儀（省略）	（省略）	（省略）
亡僧	平僧の葬儀（省略）	（省略）	（省略）
布薩	毎月15日、30日に行う懺悔の儀礼 道元も行った。		
羅漢講式	十六羅漢、五百羅漢等を礼拝する儀礼。 道元も行った。 仏殿または山門		
祝聖修正会	1月1日 当途王経誦	右所集鴻福祝献 日本開關 天照大神 天神七代地神五代 人皇九十六代今上皇帝本命元辰 当年属星 七曜九曜 二十八宿 王城鎮守諸大明神 五畿七道大小神祇 仏法大統領白山妙理権現 当道前後鎮守両社大菩薩 当郡当保諸社 当山土地 当山龍王今年歳分 主執陰陽 権衡造化 善悪聡明 南方火徳 火部星衆 護伽藍神 十八所 当国一宮気多大菩薩部類眷属 招寶七郎大権修理菩薩部類眷属 多聞天 迦羅天 打給背面使者 随逐白衣天子 旧鎮守稻荷大明神 新羅擁護八幡大菩薩	上白梵釈四天王、龍天八部、中日本国中小神祇 当境諸神 合堂真宰 本寺檀那 諸堂檀越捨田諸檀 結縁道俗 合山清衆 本命元辰 当年属星 下至堅牢地神 真観清浄之観 各明正眼 梵音海潮之音同震法雷 響衆般若之船 妙布当途 王経之妙功傳佩総持之印 普施普門示現之福聚矣 〔…〕 所集殊勲回向 本寺檀那 諸堂檀越 捨田諸檀 結縁道俗 合山清衆 本命元辰 当年属星增加威光 圓滿佳徳 所冀 聖寿無疆 椿松秀老 質皇徳有普 海嶽被不 残患 普天得風雨調適 率土全豊饒 佛日増輝 法輪常転 伽藍土地護法 安人
涅槃会	2月15日、釈迦の入滅を記念し、涅槃佛に供養する。 大悲咒誦	釈迦	為 本師釈迦牟尼如来 以酬 法乳之恩者 伏願 法界徧驚 無量声光之告 群類悉預如来常在之化
鎮防火燭	清明節、火伏の札を作り 日中諷経の次いで 消災咒1遍		火伏

浴佛	4月8日、釈迦降誕を供養する。 大佛頂萬行首楞嚴神咒諷誦	<p>釈迦 十方三世一切諸仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜</p>	<p>集所殊勲 上酬慈蔭者 仰願 毫光益來際而 福 業利塵沙 伏請 心華開滿地而 莊 嚴敷法界 (疏) 回向 今日降誕釈迦如來 大和尚以酬法乳之恩者 (回向)</p>
結制	4月13日、夏安居の結制 大佛頂萬行首楞嚴神咒諷誦	<p>總持 不動尊 首楞嚴王 回向 真如實際 無上佛 果菩提 祝獻 護法龍天 三界萬 靈 十方真宰 今年歲分 主執陰陽 權衡造化 堂 頭和尚本命元辰 吉凶星 斗 日本国内大小福德 当山土地 当山龍王護伽 藍神 招寶七郎 八幡大 菩薩 稻荷大明神 白山 妙理大権現 白衣天子青 面使者 多聞天 迦羅天 迦利帝母 合堂真宰 合 山清衆 守道諸神 增加 威光 十方三世一切諸仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜</p>	<p>冀所 山門繁昌 僧宝增 盛 諸檀福寿 快樂圓滿 諸緣成就 同圓種智</p>
土地 堂念 誦	4月14日、修行の無事を 祈願して十仏名を念誦 略三宝 大悲咒	<p>土地神 清淨法身毘盧舍那佛 円満報身盧遮那佛 千百億化身釈迦牟尼仏 当來下生弥勒尊仏 十方三世一切仏 大乘妙法蓮華經 大聖文殊師利菩薩 大行普賢菩薩 大悲觀世音菩薩 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜 十方三世一切仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜</p>	<p>回向 合堂真宰 所祈 加護得遂安居 回向 護法正法 土地龍 神 伏願 神光協贊 發揮有 利之勲梵衆興隆 永賜無 私之熏</p>
楞嚴 會	安居期間中の無事を祈る。 大佛頂萬行首楞嚴秘密神 咒諷誦	<p>真如實際 無上佛果 無 見頂相 化諸如來 五五 圓通 一切諸尊 護法龍 神 三界萬靈大梵天王</p>	<p>所冀 皇風永扇 佛日增 輝 国上安寧 法輪常轉 一衆咸安 得遂安居 山 門繁昌 檀信歸崇 諸檀</p>

		<p>天帝四王 伊勢太神宮 八幡大菩薩 当道前後氣 比氣多 仏法人統領白山 妙理大権現 護伽藍神 十八善神 招寶七郎人権 修利菩薩 打給青面使者 給仕白衣天子 護法多聞 天 供給迦羅天 合堂真 宰 一切聖造 当山旧鎮守稻 荷大明神 当山土地 当 国当保総社別社 六十余 州三千余座神祇 今年歳 分 主執陰陽 権衡造化 合 山清衆 本命元辰 本寺 檀那 諸堂檀越 結縁諸 檀 本命囉宿 当年属星 行街流神 南方火德星君 火部星衆</p> <p>十方三世一切仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜</p> <p>回向 護法衆龍天 土地 伽藍諸聖造</p> <p>十方三世一切仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜</p>	<p>施主 福寿増長 法界衆 生同圓種智者</p> <p>三途八難俱離苦 四恩三 有尽露恩 国界安寧兵革 銷 風調雨順民康樂 一 衆熏修希勝進 十地頓超 無難事 山門鎮靜絶非虞 檀信帰崇増福慧</p>
<p>施餓 鬼</p>	<p>7月1日の揭示 亡者を救う 大乘妙法蓮華經 梵網菩薩戒經 盂蘭盆經 某經 某咒読誦 7月14日 施餓鬼</p>	<p>回向 十界聖凡之衆 (結縁看經之勝) 南無十方佛 南無十方法 南無十方僧 南無本師釈迦牟尼仏 南無大慈大悲觀世音菩薩</p> <p>回向 汝等鬼神衆 我今 施汝供 此食遍十方 一 切鬼神供</p> <p>回向 無尽法界 一切群 類 財法飢饉 惡趣鬼神 邪党天魔 僻修含生</p> <p>十方三世一切仏</p>	<p>報地圓滿 停息苦患</p> <p>願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成仏道</p> <p>飽滿法味 咸發正智 輕 重諸業 皆得解脫 隱顯 利益 同圓種智者</p> <p>飽滿法味 正智開發 広 度衆生 同圓種智者</p>

		<p>諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜</p> <p>回向 無尽法界 一切含 類 財法飢饉無量鬼神 惡趣群生邪魔僻徒</p> <p>十方三世一切仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜</p>	
土地 堂念 誦	7月14日 十仏名念誦	回向 合堂真宰	
解制	7月15日 楞嚴会満散 大佛頂萬行首楞嚴秘密神 咒諷經	<p>総持 不動尊 首楞嚴王 祝獻 護法諸天 守道諸 神 大権真宰 今年歳分 主執聡明</p> <p>日本天地開闢伊勢太神宮 当国一宮気多太菩薩 白 山妙理大権現 八幡大菩 薩 稻荷大明神 当州列 廟六十余州三千余座遐邇 神祇 当山土地匝寺聖賢 四恩三有</p>	法界衆生 同圓種智者
達磨 忌	10月15日 達磨の忌日 大佛頂萬行首楞嚴神咒諷 誦	菩提達磨	<p>所集殊勲 以酬 法乳之 恩者 伏請 大願有方 真慈無 礙 曲垂提耳 俾獲安心 〔…〕(疏)</p> <p>供養 今日示寂達磨大師 以酬 法乳之恩者(回 向)</p>
土地 堂念 誦	11月中十仏名念誦	「十仏名」	回向 合堂真宰 以表佳節之誠志 以見人物之多幸 護法安 人者
成道 会	12月8日 釈迦成道の日。 大佛頂萬行首楞嚴神咒諷 誦	釈迦	所集洪勲 以酬法乳之恩 者
歳末 看經	妙法蓮華經 梵網菩薩戒經 大円覺經 回接諸衆生之慈心等	回向 寺領田畠 耕死蠢 動含靈 乃至檀越所領所 生牛馬六畜 及山林受生 禽獸虫類 水陸一切前亡	上自三宝 手足供給之人 王火客 下至畜生殘害横死之下賤 愚蒙 皆所助僧宝大悲之

	修利濟群品之妙行也 (勝)	後滅 (勝) 回向 山内含生 所緣群 類 十方三世一切仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜 (回向)	威神力 悉得感小因能大 之勝果 (勝) 所集殊勲 救濟群萌者 (疏) 佛種緣熟 脫苦得樂 法 界衆生 同圓種智者 (回 向)
龍天 回向	大乘妙法蓮華經 梵網菩薩戒經	回向 護法龍天 梵釈四 王 天地陰陽 十方真宰 日本国内大小神祇 当山 鎮守国界諸神 保内社壇 合堂聖造 合山諸檀 守宮守道 今年歳分 主執陰陽 南方火德星君 火部星衆 增加威光 十方三世一切仏 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅蜜	所冀 山門鎮靜 僧宝繁 昌 本寺檀越等 諸縁吉 利 所願成就 四恩三有 同圓種智者

(作表 大村哲夫)

Gods Stand in for the Buddha

—Prayer for This-Worldly Benefits in Zen Temples—

Tetsuo OHMURA

A Zen Buddhist will himself become the “Buddha” through Zen training. Zen Buddhism is a religion of self-salvation.

There are many prayers for this-worldly benefits performed in Zen Temples in Japan.

It seems that these contradict the ideal of self-salvation found in Zen Buddhism.

In this paper, I will discuss the prayers system of Zen Temples.

Instead of praying directly to the Buddha, people pray to the gods (Indian, Chinese or Japanese) that have promised to protect Buddhism.